

日本の工業地域の中でも特異な存在といえよう。

知多半島中南部の地理学的考察 特に地域構造について

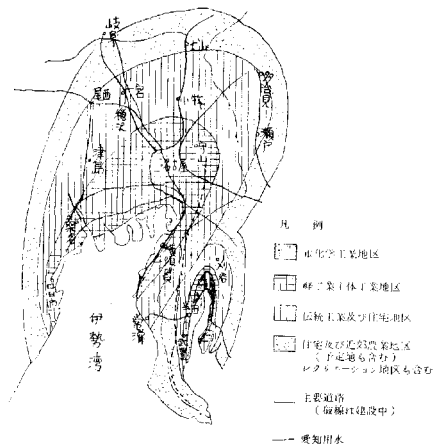
伊 東 洋 子

海上交通が主だった時代には半島は栄えたが、陸上交通が盛んになるにつれ、半島は停滞気味であった。それが近年の産業・経済の発展に伴ない新たに変容してきた。いかなる自然環境のもとに、いかなる特色があり、いかに変容し、いかなる地域構造を呈しているのかを知多半島について考察した。

fieldは知多半島の中南部、つまり名古屋市から約30～55kmにあり、行政区は半田市・常滑市・武豊町・美浜町・南知多町で面積計約200km²、人口計約20万である。

地形は丘陵性で北部は低く南部が高く(80～120m)40～50°の急傾斜で海浜に迫っている。小河川に沿って低地がほぼ東西にのびて開田されている。古い地層ほど南方に現われ新第三紀層の知多層群、常滑層群の上に第4紀層の武豊砂礫層が重なり、その上に海成・河成の段丘砂礫と沖積世の砂・礫・粘土などが不規則に重なっている。気候は暖流の影響で年平均気温は15°内外と比較的恵まれているが降水量は1500～1700mmで表日本式気候としては少なく、丘陵性の半島で河川が補流のため乏水性を帯び愛知用水通水(1961年)以前は水不足に悩まされた。愛知用水は農業用水を第一義としていたが本地域では上水道用水としての意義が大きい。

土地利用をみると河川の流域及び丘陵の谷間の沖積地に水田、段丘又は丘陵の中腹に畑と山林が散在し、近年衣浦湾沿岸に工場用地造成のための埋立地の増加、かつての桑園の果樹園への転換、又住宅地化等顕著な傾向がある。



圏構造の形成(図)

本地域において、その産業構造や人口の増減等から行政区画によって三地理区を仮設し、各地理区の特色 — 衣浦湾沿岸地区では繊維工業と醸造業、伊勢湾沿岸地区では製陶業、岬端地区ではみかん農業と漁業 — を考察すると「丘陵性の半島」という地理的条件が一因となって発展したことがわかる。最近の変容として衣浦湾沿岸の工業化 — 臨海工業地帯の立地 —、伊勢湾沿岸の都市化 — (名古屋南部臨海工業地帯の影響による)常滑市周辺の住宅地化 —、岬端地区の観光地化 — 農業・漁業と結合した観光業の発展 — があげられる。

ここで本地域の地域構造を考えてみると衣浦湾を中心とした圏構造 — 臨海部に重化学工業、その奥に軽工業・

伝統工業が立地し、その奥に住宅地及び農耕地が広がっているという帯状構造が海により切断された圏構造一が認められ、又一方、常滑市周辺は衣浦湾地域よりもむしろ名古屋方面との関連が深く、衣浦湾の場合と同様、伊勢湾を中心とした圏構造の一部の軽工業・伝統工業地帯に属すると考えられる。又岬端部は中京地区のレクリエーション地区として圏構造の最も外郭にあると考えられる。以上のように本地域の地域構造は衣浦湾及び伊勢湾を中心とする二つの圏構造であると言える。

房総半島西南部の地理学的考察

遠藤規子

本論文では、一地域を地誌的にとり上げ、その地域性を明らかにすることを目的とした。主産業たる農業を中心に考察し、さらに農業を通して他産業、すなわち漁業及び近年海岸部の農村に大きな影響を及ぼしている観光業について述べた。

調査地域は、房総半島の西南部で、北部は鋸山、南部は館山平野に限られ、西部は東京湾に面している。地域の大半が丘陵地で、その中に小平地、小河谷が介在している。若い地質時代の隆起運動により数段の海岸段丘、河岸段丘の発達をみる。

第一次産業を主体とし、東京内湾にみられるような工業地域造成も行われず、また、都市化の波もまだ及ばない地域である。他の南房総地域の市町村同様、人口は漸次減少し、農家数も減少している。だが、離農による人口流出は顕著には起っていない。

農業からみれば、京浜に対する遠郊農業地域と言うことができる。地形の制約で、1戸当り平均耕地面積が、71.6 aと狭いので、小面積でも収益性の高い作目を取り入れている。専業経営は少く、2～3種類の作物を組み合わせて経営している。農業センサス旧大字別統計(S.40年)を使用して、作目の組み合わせから15地区に農業地域を分けることができた。地形及び気候条件が地域内で複雑に変化していることが、農業土地利用を変化に富ませている原因の一つであると考えられる。また、富浦のピワ栽培地では局地気候をうまく利用して農業が行われていることが、南無谷における日最低気温の観測結果からも明らかとなった。

観光業については、昔から地域の住民が宿を提供することによって観光地化の主体的推進者としての一翼を担ってきた。海水浴場地という季節的な観光地であるので、農家、漁家の兼業として民宿が行われている。民宿は夏季だけで相当まとまった現金収入が得られるので、兼業としては割の良いものである。海水浴客の増加にともなって、民宿は海岸部ほぼ全域にわたり行われており、海岸地域の農業や生活に様々な影響を及ぼしている。内陸部には、たいした観光資源がないこと、海に近いということが民宿業を発展せしめた一大原因であること、ここ2～3年日帰り客が増えつつあることなどからして、民宿が内陸部までひろがっていくことはあまり考えられない。

次に、漁業は本地域においては、外房地域と比較するとさかんではなく、小規模な沿岸漁業が大半を